

取材のため神戸の川崎造船所争議に接近したこと、日本の無政府主義者と往復したことくらいのものであった。彼には英文の『日本における社会主義運動と労働運動』の著がある。

また同年九月には、中国の同志陳春培が国外に追放された。彼は楊敬慈その他の留学生同志とともに無政府主義結社「光社」（のち未来社、無名社と改称）をつくっていたことを官憲にかぎつけられたからであった。

陳春培は中国に帰った後、雲南から「中国の無政府主義運動」なる一文を『労働運動』によせたことがあるが、彼はその最後に「中国に帰って考えてみると、よくもあんな七面倒な国に窒息もしないで暮してきたと思うよ」と書いてあった。

全国労働組合総連合の計画

第一回メーデーに促されて組織された東京の労働組合同盟会は、翌年の第二回メーデーのち友愛会が脱退したが、当時の財界不況による資本金階級の強い攻撃にたいする対抗から、大正十一年（一九二二）の第三回メーデー直後再び労働組合の間に全国的な共同戦線体を結成しようという気運がもたらされた。

すなわち、東京においては五月七日、月島労働会館にメーデーの会計報告会が開かれた席上、教員組合啓明会の下中弥三郎から「全国労働組合総連合」の計画を進めることの提案があり、出席各組合とも満場一致で、誠意をもってこの計画に協力しようと申合せた。これと前後して労働総同盟の関西同盟にも同様の決議があり、「総連合」は労働組合の問題となり、希望になってきたのである。

これよりさき、労働組合同盟会側では、全国的総連合の前提として、職業別、産業別の地方的連合を組織する必要があると感じ、その促進に努めていたのであったが、同年六月、純労働者組合、機械技工組合、日本労技会、本芝労働組合、海軍工人会、陸軍現業員組合の六組合が「機械労働組合連合会」を組織して一勢力を加え、芝浦労働組合は加盟はしなかったが、しだいに自由連合派と相接近しつつあった。

また関西においても、大阪鉄工組合、立憲造船労働組合、美術友染工組合、京都印友会、日本機械労働組合、大阪皮革工組合、関西自由労働者組合などで「組合同盟会」をつくった。反総同盟派と自由連合派との連合体であった。

かくてこれらの各労働組合が、関東も関西も、自由連合派も総同盟派も、相携えて総連合結成の運動を推進することになったのである。

組合同盟側と総同盟側はしばしば協同打合せ会を開いて折衝をつづけ、九月十日、東京神田の松本亭で関東関西各派代表者の準備委員会を開いて規約草案作成につき協議したが、総同盟はこの席において、「種々異なる傾向の組合を包容するのであるから、初めのうちは東京の組合同盟会のような組織で進めよう」という最初の言明を忘れたかのごとく、強力なる中央集権主義（合同主義）を主張し、総同盟によって全国の労働組合にたいする指導権を確立しようとする野望を露骨に示すにいたった。（この態度は中間的労働組合をも刺激し、反総同盟的感情を高からしめる結果ともなった）これにたいし組合同盟側は自由連合主義を主張して譲らず、総連合組織の前途はなほだ困難を感じしめるものがあつた。

しかし準備委員会では、新組織の名称を日本労働組合総連合とすること、新組織の目的を労働組合共通の意志表示、労働組合組織の促進、労働組合の国際的連絡とすること、その他の準備事項を決定して創立大会にのぞむことになったのである。

この準備委員会から創立大会にいたる間、両者の論戦はいよいよ熾烈となった。正進、信友両組合の有志は「労働組合全国総連合について、階級闘争の戦士たる全国組合運動者に告ぐ」と題する小冊子を発行して、中央集権主義そのものが労働者解放運動の精神にそむくことを指摘し、われわれの理想とする社会の芽生えをまずわれわれ自身の団体のなかにつくって行かねばならぬことを主張し、無政府主義者は挙げてこれを応援した。一方、総同盟を足場にして労働組合に食い入ろうとする共産主義者は、総同盟に加担して理論的支持を与え、ただに労働組合だけではなく、アナ、ボルの両者もここに両陣営に分れ鏖めり合いになったのである。

日本の労働組合運動に記念さるべき日は来た。日本労働組合総連合創立大会は、九月三十日、大阪の天王寺公会堂で開催された。両派の参加代議員一〇六名、そのうちには次のごとき人たちがいた。

自由連合派、その他

稻生松太郎、和田栄太郎（正進会）、渡辺満三（時計工組合）、南芳雄（自由労働者組合）、坪井専次郎、山田文夫（造船船工労）、俵次雄、戸田仁三郎（純労働者組合）、熊田国吉（工人会）、水沼辰夫、小野源之助（信友会）、杉浦啓一、佐藤護郎（機械技工）、佐藤陽一、天土松太郎（芝浦労働）、高山久蔵、神田明徳（本芝労働）、宇野信次郎、佐藤忠蔵（労技会）、以上関東。後藤田正毅（造船）、坂本孝三郎（大阪鉄工）、以上関西。

総同盟派、その他

松岡駒吉、高田和逸、横石信一、内田藤七、小原源一（以上関東）。西尾末広、塚本重蔵、平井美人、野田律太、中村義明、辻井民之助、奥村甚之助、半谷玉三、藤岡文六、青柿善一郎、八木信一、河村保太郎（以上関西）、荒谷宗治（名古屋）。

傍聴席には、大杉栄、堺利彦、山川均、荒畑寒村らの、無政府主義者、共産主義者、および各組合の闘士。

社会運動、労働運動の精鋭をすぐつて一堂に相会したのである。

日本労働組合総連合の決裂

大正十一年（一九二二）九月三十日は日本労働組合総連合結成協議大会の日である。大阪の天王寺公会堂は自由連合派、総同盟派の各代議員および各労働組合員、無政府主義者、共産主義者の傍聴者によって埋めつくされた。

会議は最初から陰湿な空気をただよわせ、まず傍聴席の問題でもんで、喧々ごうごうたるものがあったが、やがて開会が宣せられ、大阪向上会八木信一を議長として規約審議に入った。

第一条の名称「日本労働組合総連合」は異議なく可決され、第二条にうつった。

第二条 本連合ハ五十名以上ノ組合員ヲ有スル労働条件ノ維持改善並ニ社会改造ヲ目的トスル労働者ノ職業的マタハ産業的闘争団体タルコト

自由連合派の水沼辰夫案によって、以上のごとき可決されたが、その但書に至って早くも大論戦が

おこった。

但シ同一職業マタハ産業組合二ツ以上加盟セルトキハ、地方的マタハ全国的連合ヲ組織スルモノトス

という、機械連合、組合同盟を代表する「水沼案」にたいし、総同盟を代表する「平井案」

但シ同一職業マタハ産業組合二ツ以上加盟セルトキハ、合同ヲ目的トスル全国的連合ヲ組織スルコト

が提出された。これに賛成した中村義明は「労働組合は資本主義の発達に沿って発達すべきで、その偉力を示すためには中央集権組織でなければならぬ。従つて、組合は合同を目的としなくてはならぬ」と主張し、総同盟はこれに大拍手を送った。

これにたいし労技会の宇野信次郎はその非を鳴らし「水沼案」を支持して自由連合派の歓呼を浴びた。自由連合派の意見は「われわれは戦闘力の強大を欲するが、労働者解放運動の精神に反する中央集権組織に反対する。金力の鎖を断ち切るために権力の鎖を強くする組織には反対である。

然らばいかなる組織を欲するかというに、今いくつにも分れている職業的または産業的労働組合が労働者の実際の必要から連合するには、まず同じ地方で同じ産業に従事しているものから始まるのが自然で、またそれがいちばん強い連合体の単位である。その地方の同一産業の組合連合がいくつも集つて地方的大連合をする。一方、同一産業組合が全国的に連合する。それらのすべてが集つて初めて労働組合の全国的総連合というものになる。そして、共通の問題は、進んで一致協力して解決につとめ、単独の問題は自身で解決する覚悟と力を持つ組合の自由連合組織こそ、真にわれわれの望むと

ころのものである」というのである。

しかるに総同盟の横石信一から更に、

但シ同一産業マタハ職業組合二ツ以上加盟セルトキハ、合同ヲ前提トシテ地方的マタハ全国的連合ヲ組織スルコト

の第三案が出て、総同盟は、平井、横石両案は同一趣旨であるから一致して横石案を支持することとなり、水沼案と対立した。

かくて代議員の討論、双方傍聴者の声援、弥次の応酬に会場は喧騒混乱の極に陥つたので、一時休憩して、両派代議員の協議会が開かれた。

自由連合派は協議の報告として「われわれも修正案を撤回するから総同盟も撤回せよ、原案のままにしよう」と提議したが、総同盟は断然これを拒絶し、決裂を賭しても合同を主張するといひ、物別れとなつた。

再開の後、坪井専次郎は水沼案の、辻井民之助は横石案への賛成演説があり、それに続いて自由連合派からも総同盟側からも「議長、議長」を連呼して傍聴席も総だちになったとき、どこからか飛んできた土瓶で壇上の水差しがフツ飛んだのを機会に、臨監の官憲から会議の中止と解散が命ぜられた。

組合同盟側は議長八木信一を通じて、会議の続行をはかる方法を講ずること、それが不可能ならば適當の結末をつけるため協議することを提議したが、八木は何らの処置を講ぜず、総同盟は「決裂」の宣言を發した。

自由連合派も続いて宣言を發したが、自由連合派のそれは総同盟側の絶対的絶縁なるにたいし、そ

の最後を「しかしながら我々の正面の敵は資本家である。いかに職業的運動者が自己の立場を維持する必要上我々が敵視しようとも、もし普通の問題で同一歩調をとる必要を感じた場合には、将来の希望などを条件とせず一致の行動をとるだけの雅量のあることを声明する」と結んだ。

労働組合の総連合は決裂した、同時に、これがヤマとなつて、アナーキズムとボルシェヴィズムとの闘いもいよいよ熾烈を加えるにいたつた。

自由連合派の組合有志は『組合運動』を発刊して自由連合主義を高唱し、組合の組織整備にもつとめた。

なお、望月桂、諏訪与三郎、布留川桂、綿引邦農夫、宮越信一郎、長沼富らを同人とする月刊『労働者』が黒労社から発行されたのは同十一年十一月であり（これは高尾平兵衛らの『労働者』とはちがう）、望月桂、木下茂を中心とする渡辺精一、古川時雄らの農村運動同盟から『小作人』が出たのは大正十二年三月であつた（これは昭和四年までつづいた）。

総同盟では、この『労働組合総連合大会』ころからの共産主義者との関係が、のちに総同盟を割つて日本労働組合評議会をつくらしめることになるのである。

大杉栄の渡仏

大正十一年（一九二二）十一月、東京本郷の労働運動社にいた大杉栄のところへ、フランスの同志コロメルから通信があり、一九二三年一月から二月の初めにかけて、ベルリンで国際無政府主義大会を開くから来いということであつた。

先ずこの大会につき簡単に記しておくが、一九二二年九月に、スイスのセン・ティミエで、最初の国際無政府主義大会といつてもいい、いわゆるセン・ティミエ大会の五十年記念会があり、この記念会には、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、ロシア、および中国その他の、百五十名ばかりの同志が集まり、そのなかにはイタリアの老闘士エンリコ・マラテスタもローマからひそかに国境をぬけだし参加した。

記念会是一種の国際大会のようなかたちになり、無政府主義の組織のことや、無政府主義とサンジカリズムとの関係などが問題になつていろいろ議論があつた末に（そのときマラテスタは「革命と暴力」と題する痛烈な演説をやつた）、フランスの代表コロメルらの發議で、あらたに国際無政府主義同盟を組織しようということになり、急に国際大会を開くことにきまつた。その大会への招待状がきたのである。

大杉栄はそれを見ると直ちに渡仏を決意したが、もとより日本政府がその旅券を交付するはずがないので、中国人としてのパスポートを手に入れる工作のために、山鹿素治が北京へいった。

山鹿はエロシェンコ（大正初年から日本にきていたロシア人で、エスペランチストの盲詩人。日本の社会運動者と交わり、うちに日本から追放された。洋画家中村彝の代表作「エロシェンコ像」は知られている）の紹介で陳崑山、景梅九、王魯彦らにしばしば逢つたが、北京での旅券入手は不可能とわかり、上海に転じて同志の医師鄧夢仙、鄭佩剛に寄り、そこで大杉と落ち合った。

大杉はフランス租界の外人宅に下宿して山鹿とともにパスポート入手の運動をつづけていたが、あたかもそのとき上海に来たリヨンの中法大学校長の好意でその大学に留学する広東省台山県人唐繼

(タンチイ)の名義で旅券を手に入れ、大正十二年一月二十日フランス船アンドレ・ルボン号で出発した。山鹿はそれを見送って日本へ帰った。

大杉はマルセイユに上陸し、しばらくリヨンの中国の同志たちのところにいたが、やがてパリへ行き、フランス無政府主義同盟機関「ル・リベルテル」社にコロメルを訪ねた。当時、ル・リベルテル社では、週刊『ル・リベルテル(自由人)』、月刊『ラ・ルヴェ・アナリススト(無政府主義評論)』を発行しており、ラ・リブレリ・ソシアル(社会書房)という本屋もやっていた。

ベルリンで開かれるはずであった無政府主義大会は、いろんな事情で無期延期となったが、大杉はドイツへ入ろうとして、滞仏中の同志、画家林俊衛の力もかりて奔走したが、その手続きは容易にはかどらなかった。大杉はその以前からロシアのマフノ運動に興味をもち、「マフノの右腕」と称せられたヴォリンがドイツへ亡命して来ていたので、それに逢うのも一つの目的だったのである。

そうこうしているうちにメーデーが来た。大杉はパリ北郊の鉄工町セン・ドニの集合に参加し、コロメルに次いで演壇に立ち、日本のメーデーについて演説したところ、フランスの官憲のために捕えられ、にせのパスポートがばれてラ・サントの牢獄に入れられた。裁判の結果、大杉は禁錮三週間に処せられ、フランスから追放されて、七月、神戸へ帰ったのであるが、途中、船が上海に着いたとき突然あらわれて手を握ったのは、かつて日本を追放された同志コズロフであった。(コズロフについては前に書いた。われわれは、いたるところに国を超えた同志愛を感じるではないか)

この大杉が帰る直前、すなわち大正十二年六月二十六日早朝、戦線同盟の高尾平兵衛、吉田一、平岩巖、長山直孝が反動団体赤化防止団の団長米村嘉一郎を襲い、凱歌をあげて引きあげるところを、

後ろから打った米村のピストルのために高尾平兵衛が射殺された事件があった。

なおそのころ、東京錦糸堀の汽車会社に労働争議がおこり、関東車両工組合は機械労働組合連合会はもとより、自由連合派各組合の応援のもとにストライキに入ったのであったが、勢力拡張のために手段を選ばぬ労働総同盟は、共産主義の南葛労働組合とともに御用組合誠睦会を援けて罷業破りを行い、自由連合派に対抗した。これに憤慨した自由連合派各組合、および無政府主義団体の有志約五十名が、罷業合りの本拠「総同盟関東鉄工組合本所支部」を襲撃したことがある。同年七月初旬、高尾平兵衛が殺されていくばくも経たぬときである。

運動は行動的にいよいよ熾烈になりつつあった。

大杉ら軍閥の手に倒る

大正十二年九月一日、関東に大震災火災がおこり、死者、行方不明者総数十四万、家屋被害総計六十万余戸を数え、被害は殊に東京、神奈川に甚だしかった。この混乱に乗じて、朝鮮人および社会主義者の放火暴動の流言が盛んに行われると同時に、各所につくられた自警団は手に手に棍棒、竹槍、刀剣をたずさえて「鮮人狩り」に血眼となり、社会主義者の住居を襲撃しはじめた。そして警察は、社会運動者、進歩的労働運動者を一せいに検束するとともに、留置場内で暴虐の限りをつくしたところも少なくなかった。

そして、亀戸警察署に検束されていた純労働者組合の平沢計七、南葛労働の河合義虎、北島吉蔵、近藤広造、佐藤欣治、吉村光治、加藤高寿、山岸実司、鈴木直一らは、九月二日、習志野騎兵隊によ

つて刺殺された。いわゆる亀戸事件である。(この事件にたいしては、自由法曹団の山崎今朝弥、布施辰治の両弁護士が最も熱心に調査し、その対策を講じた)

また、無政府主義者大杉栄は、妻伊藤野枝とともに、九月十六日横浜市鶴見に避難中の弟をたずね、そこにいた甥の橘宗一(七歳)をつれて帰る途中、淀橋柏木の自宅付近で憲兵隊の一部によって拉致され(そのとき淀橋署の松本警部補、滋野巡查部長が手引したとみられ、のちに取調べをうけた)、その夜三人とも殺害された。場所は麴町憲兵隊本部であったといい、憲兵大尉甘粕正彦、同曹長森慶次郎、同上等兵鴨志田安五郎、平井利一、本多重雄らによって絞殺されたものであるが、果して絞殺であったかどうか、明瞭でない。今なお一つの謎として残されている。

はじめ三人が憲兵隊に拉致された事実が判明せず、憲兵隊も警視庁もまったく知らないという張つたが、九月二十一日の新聞は、東京憲兵隊分隊長甘粕正彦が九月十六日職務執行のさい違法の行為あり、二十日軍法会議に付せられたことを報じ、同時に、関東戒嚴司令官陸軍大将福田雅太郎が本職を免ぜられ、憲兵司令官陸軍少将小泉又一、東京憲兵隊長小山介蔵が停職になったことを報じた。こえて二十四日に至り、ようやく「陸軍憲兵大尉甘粕正彦に左の犯罪あることを聞知し、捜査予審を終り本日公訴を提起したり、甘粕憲兵大尉は本月十六日夜大杉栄外二名の者を某所に同行しこれを死に致したり」云々と発表し、ついで共犯森慶次郎らも起訴された。彼等は三人を殺して、死体を憲兵隊内の古井戸に投げこみ、所持品いっさいは十七日、甘粕が通信省の焼跡に持ちだして焼きすてたというのである。

この甘粕らの軍法会議の判決は同年十二月八日にあり、甘粕は懲役十年、森は懲役三年、鴨志田ら

三名は無罪。ただし森は約一カ年で、甘粕は約一カ年半で仮出獄となった。のち甘粕は満州国成立とともに満州大映の社長となり、敗戦直後、青酸カリで自殺した。

大震災の混乱に乗じて社会主義者、朝鮮人にたいする反動的宣伝をなし、一般民衆のテロリズムを煽動したこと、および亀戸事件、大杉事件など軍隊の一部が直接これを行ったこと、ならびに習志野騎兵隊、憲兵隊の暴虐がうやむやに葬られたことなど、その間には一連の関連があり、この官憲軍閥の行動は、労働階級、進歩的知識階級の甚だしい憤激を買った。

大杉栄、伊藤野枝らの葬儀は、無政府主義思想団体と自由連合派労働組合主催のもとに、十二月十六日、下谷の谷中斎場で行われたのであったが、同日の朝、反動団体大化会の下鳥繁造らが労働運動社においてピストルを乱射して大杉らの遺骨を奪うという一幕もあった。(このとき下鳥はピストルをもぎ取られ、文字どおり蹂躪された)

かくて大杉栄、伊藤野枝を失ったが、労働運動社は、近藤憲二、和田久太郎、村木源次郎、山鹿泰治、水沼辰夫、和田栄太郎を同人として、十二月、第四期『労働運動』を発刊して、震災の焼土の中に旗をかかげた。その創刊号の巻頭には「戦友の死」と題し大杉、伊藤の死を悼み、

「同志諸君！ われ等の戦友は倒れた。されどわれ等は不断の戦いに従っている。われ等は数段の勇を鼓して進まねばならぬ。倒れたる戦友の屍をふみ越えて進まねばならぬ。一層の覚悟と決心をともって。

同志諸君！ われわれの戦友の屍を焼く煙はあがっている。勇敢不屈なりし同志の屍を焼く煙はあがっている。されど同志よ、この貴き死灰の下より、および彼がごとき多くの人々の死灰の下より、

われ等の自由の大樹は生い出ずるであろう」と書いている。

この年十二月二十七日、難波大助が開院式に臨む摂政官（いまの天皇）を虎ノ門付近で狙撃した。いわゆる虎ノ門事件である。彼は山口県人、代議士難波作之進の子で、当時本所で自由労働をしており、どの団体にも属していなかったが、社会主義の影響をうけていたといわれている。裁判は非公開で死刑になった。

軍閥への報復

大正十二年九月、関東大震災の混乱に乗じて多くの朝鮮人を虐殺し、また同志大杉栄らを暗殺した反動軍閥に報復するため、震災当時治安維持の責任者であった、ときの戒厳司令官福田雅太郎大將の殺害を決意した労働運動社の和田久太郎、村木源次郎は、大正十三年にはいるとともに、具体的にその準備をすすめてつあった。

これより先き、中浜鉄（富岡哲）、古田大次郎、河合康左右らは「ギロチン団」を結盟し、日本における最初のテロリスト行動隊たらんと計画で、同志を糾合するとともに秘密運動をおこしていたが、大杉らの殺されるとともにこれまたその復讐を決し、団員田中勇之進は十二年十月、三重県松坂で甘粕正彦の弟の五郎を襲撃し（懲役十三年）、また運動資金調達のため古田大次郎らは大阪市外小阪町（いまでは布施市）第十五銀行出張所の行員を刺殺した事件があった。

この小阪事件で、河合康左右、小西次郎、茂野栄吉、内田源太郎、小川義夫、仲喜一、上野克己、伊藤孝一は捕えられ、古田、中浜はのがれて朝鮮京城にいたり、中国方面からの爆弾、ピストルの入

手に専念していた。

このことを知った和田久太郎は京城へ行き同じ目的のため協力したが、成功しなかった。

十三年四月、中浜は鐘紡社長武藤山治を襲って捕えられたので、和田、村木、古田は東京市外（現在は品川区）上蛇窪に島貞尚の偽名で一戸をかまえ、画策をすすめた。すなわち、倉地啓司は広島県下の土工に住みこみ、そこから工事用のダイナマイトをもちだし、上蛇窪で爆弾の製造にとりかかったのである。

七月にはいつて、東京市下谷区清水町の共同便所、つづいて東京青山墓地内で爆弾が破裂した事件があった。これは古田大次郎が行った爆弾の効力試験であって、それによって相当威力あることをたしかめたが、その力をさらに強大にするため、爆弾ケースの製造を京都にいた新谷与一郎にたのみ、新谷は同志阪谷貫一、逸見吉三らの助力をえてこれが製造にとりかかった。

その間、村木源次郎、和田久太郎は、しばしば福田雅太郎をその自宅（代々木山谷）付近に待ちうけたが機会をえなかった。しかるに大正十三年九月一日夜、本郷区菊坂町の長泉寺で在郷軍人団主催の震災一周年記念講演会があり、そこへ福田が出席することを知ったので、同日、和田は爆弾、ピストルをたずさえて本郷四丁目燕楽軒前に、村木はやはりピストルを懷ろにして長泉寺の会場内に待ちうけ、古田は小石川餌差町電車停留場付近で見張りして福田のくるのを待っていた。

午後六時、福田大將は前記の長泉寺へ行く途中、まがり角の燕楽軒に自動車をとめ、休憩のため下車したので、和田は直ちに接近して発砲したが、第一発は空弾、第二発目はピストルの回転わるく発射に至らず、わずかに背後に火傷を負わせたに止まった。そして群衆のためにつかまったのである。

翌々三日、和田の捕えられていた本郷本富士署の廊下に爆弾が置いてあったが、点火不十分であったため爆発にいたらなかった。それは古田がやったのである。

さらに同六日、福田の家へ小包がとどき、たまたま同家に来合せていた大将の長女（のちに神兵隊事件に連座した安田中佐の妻）が開くと、ごうぜん爆発して天井や床板をうちぬいた事件があった。これは村木と古田とが送ったものであった。

かくて村木と古田とは引つづき目的貫徹を画策していたが、同日、上蛇窪のかくれ家で警視庁の刑事隊三十余名に包囲されてつかまった。

また、中浜鉄らを救い出すため大阪若松刑務所の爆破をくわだてた山田正一、小西武夫らも捕えられた。

これら相つづいた事件は裁判の結果、

和田久太郎（無期）、村木源次郎（予審中病死）、古田大次郎（小阪事件を合せ死刑）、倉地啓司（12年）新谷与一郎（5年）、

阪谷貫一（1年半）、逸見吉三（1年）、

中浜鉄（死刑）、河合康左右（無期）、小西次郎（無期）、茂野栄吉（14年）、内田源太郎（14年）、小川義夫（14年）、仲喜一（12年）、上野克己（3年）、伊藤孝一（3年）、

山田正一（予審中死亡）、小西武夫（同）、篠部治之助（4年）、小西松太郎（4年）、

なお、和田久太郎には未決中に書いた『獄窓から』の著があり、昭和三年二月、秋田服役中みずから縊死するまでの分も、のちに付加出版され、古田大次郎にも未決中に書いた『死の懺悔』『死刑囚

の思出』が出版された。

かくて震災後、無政府主義運動は多くの同志をギロチンと牢獄とに送った。

朝鮮同志の運動

ここで、日本の無政府主義運動と深い関連をもっている在日朝鮮同志の運動について記しておこう。一九一〇年（明治四十三年）日韓併合以来、日本は朝鮮にたいして徹底的な警察政治をおこなうとともに、一方、日鮮融和運動をおこし、弾圧と懐柔の両政策をもつて締めつけていたのであるが、これに対する抵抗は大正八年の「万歳騒擾」の独立運動として表面にあらわれてきた。

それからまもなく、東京で「黒濤会」が組織された。その名からすれば無政府主義者の団体かのようにであるが、黒濤会はそのなかに、朝鮮独立運動者、無政府主義者、共産主義者などの各派をふくむ、一種の民族団体といった方が適切な団体であった。そのなかにいた無政府主義者たちが強く主張したので、かく命名されたのである。

しかし、当時日本の社会運動にもアナ・ボルの対立があったように、黒濤会の内部にもその摩擦がおこり、ついに同会は、金若水ら共産主義者の「北星会」と無政府主義団体「黒友連盟」との二つにわかれた。そして「連盟」には、朴烈、洪鎮裕、韓晥相、張讚寿、鄭泰成、崔圭稜、陸洪均、徐東星、徐相庚、河世明、金重漢、金正根、金亨潤、李弘根らがあり、共産派に比べて圧倒的に多数であった。この「黒友連盟」はのちに「黒友会」と改称された。

朴烈らはまた「不逞社」をおこし雑誌『不逞鮮人』を出したが、この題号を不穏当とされ『太い鮮

人」と改題、さらに数人の日本の同志も加わって『現社会』を発行活動した。

大正十二年九月一日、関東に大震災がおこり、その混乱の最中に「鮮人暴動」の流言が放たれるとともに朝鮮人虐殺が大量的に行われ、同時に黒友会員、不逞社同人の多くが検挙され、そのなかには栗原一夫、小川武、野口品二、新山初代らもふくまれていた。彼らは最初、治安警察法違反（秘密結社）として検挙されたのであったが、大正十四年七月にいたってその大部分が免訴となり出獄した。しかし金重漢は爆発物取締法違反として禁錮三年、朴烈および妻金子文子は不敬大逆罪として大正十五年三月死刑を宣告され、勅令により無期懲役となった。（金子は栃木刑務所に服役中、同七月縊死した。）

この、いわゆる「朴烈事件」は震災時の「鮮人虐殺」にたいし、彼らの間にはこういう計画もあったという見せかけのため、日本政府がむりやりでっちあげた事件と見るべきであろう。

この事件で免訴となり朝鮮へ帰った洪鎮裕らは、同地で「黒旗連盟」を組織しようとしたが捕えられ、大正十五年七月には「黒友連盟」のいわゆる大邱事件がおこり、方漢相、申宰模、馬明らは、日本から送られた金正根、栗原一夫、棕本運雄らとともに獄に投ぜられた。布施辰治弁護士が昭和二年八月の『労働運動』誌上に発表したように、検事は栗原らにたいして「無政府主義を抱懐する」というだけの理由で懲役十年を求刑したが、金正根は獄死し、栗原らは懲役四年に処せられた。

なお労働組合運動としては、大正十三年に「東興労働同盟」が組織され、崔洛鐘、丁賛鎮、徐相漢、陳哲、李東淳、梁一童らこれに属し、吳宇泳、卞榮宇、鄭甲辰、李宗文らは「朝鮮自由労働者組合」を結成した。

また大正十四年末には、韓何然、李時雨らによって「自由青年連盟」がつくられ、昭和三年には丁賛鎮、金元善らが「黒色労働者連盟」を組織し、消長はあったが昭和十二年ごろまでつづいた。

当時、東京中野野方町に朝鮮学生寮「鶏林荘」があり、そこには金正根、宋映運、丁賛鎮、羅月煥らがあり、崔学柱、柳致真、安鐘浩らも行動をとみにし、学生以外の同志の集合所ともなっていて「鶏林荘」はまさに在東京朝鮮無政府主義運動の本拠の観があったが、昭和七年、朴春琴、李起東らの日鮮融合団体「相愛会」の暴力によって乗つとられ、その後運動が衰退するのであるが、これはただに朝鮮同志の運動だけではなく、昭和六年にはすでに満州事変もおこっており、世はあげて一大反動期にはいつてきた時代で、日本の社会運動も暗黒時代に追いこまれつつあったのである。

そのころ、朝鮮および在日本、在満州の同志、李学儀、丁賛鎮、朴有成、金豪九らが相たずさえて「一声」の運動があり、京城に秘密結社を組織し盛んに秘密出版をやったが、金豪九が逮捕されてから運動は伸びなかった。この「一声」の運動は平壤国旗事件の母体をなすものである。

黒色青年連盟

一時は左傾しつつあった労働総同盟も、大正十二年の中央委員会において、普選実施後は議会政治をみとめ選挙権を行使することを決議し、翌年二月の大会ではこれを正式に承認して、いわゆる「現実化」への転換を宣明した。

総同盟が右傾するとともに、他の労働組合にもこれに歩調を合せるものが出て、いままでも自由連合派にあった機械労働組合連合会も大正十三年三月に臨時大会を開いてその主張を変更するに至った。